農業女性の更年期の実態調査 ―その２―

農業女性の更年期の実態調査について

はじめに

先に実施した女性の更年期に関するアンケート調査について職業別の比較検討の結果、農村女性の特徴を、かなりはっきりと捉えることができた。しかし、農業に携わる更年期女性の健康については、よりきめ細かな対応が必要と考え、特に農村女性に対して、別建てのアンケートを作成しその特性を解明することにした。

さらに、京都府福知山市におけるケース・スタディを何例か求め農業女性の生活を追跡した。

Ⅰ　問Ａ　属性

１）Ａ－１　就業形態と農業の形態

自分の就業形態を農業と答えた人以外にも、数はそう多くはないが農家の人が存在する。（第１表参照）

第１表　就業形態と農業の形態

			就業形態と農業の形態				
			専業農家	第一種兼業	第二種兼業	その他	合計
就業形態	農業	度数	82	23	18		123
		就業形態の％	66.7%	18.7%	14.6%		100.0%
		農業の形態の％	78.8%	32.4%	38.3%		54.7%
	雇用正社員	度数	1	4	3		8
		就業形態の％	12.5%	50.0%	37.5%		100.0%
		農業の形態の％	1.0%	5.6%	6.4%		3.6%
	パート	度数	2	6	1		9
		就業形態の％	22.2%	66.7%	11.1%		100.0%
		農業の形態の％	1.9%	8.5%	2.1%		4.0%
	その他・自由・自営業	度数	4	7	7		18
		就業形態の％	22.2%	38.9%	38.9%		100.0%
		農業の形態の％	3.8%	9.9%	14.9%		8.0%
	無職	度数	15	31	18	3	67
		就業形態の％	22.4%	46.3%	26.9%	4.5%	100.0%
		農業の形態の％	14.4%	43.7%	38.3%	100.0%	29.8%
合計		度数	104	71	47	3	225
		就業形態の％	46.2%	31.6%	20.9%	1.3%	100.0%
		農業の形態の％	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

自分の就業形態を農業と答えた人（以下農業女性と略記する）のうち、専業農家は82人（66.7%）であり、第一種兼業23人（18.7%）、第二種兼業18人（14.6%）となっている。

農業女性のうち「主たる労働力となっている人」は58.1%、家事中心で農業は補助的立場の人が36.4%である。

正社員で農家の人は８人（3.6%）、パートで農家の人は９人（4.0%）であり、主たる労働は共に１人（1.0%）、２人（2.0%）と少なく、「勤めが中心で農業は補助」という人が当然ながら４人（50.0%）、８人（61.5%）と主力である。また、正社員、パートの人で「家事中心で農業は補助」が３人（37.5%）、３人（23.1%）あるのは、解釈に苦しむところである。

その他・自営・自由業（以下自営と略記する）の人は18人（8.0%）だが、専業農家は４人（22.2%）第１種、第２種は共に７人（38.9%）であり、農業経営上主たる労働力である人は２人（9.1%）と少なく、主として家事中心７人（31.8%）、勤め中心９人（40.9%）である。

無職と答えた人の中の78人（32.1%）（第２表、第１表では67人29.8%）であり、そのうち「主たる労働力」と答えた人は20人（25.6%）いるが、主力は家事中心49人（62.8%）である。即ち、第２表によれば農家のうち5.2%がパート、3.2%が正社員、8.8%が自営、31.2%が無職の人である。

主たる労働力になっている人は農業75.0%、無職20.0%である。

3）A－3　農業面積と　A－5　労働時間

第2表　就業形態と農業経営上の立場

			農業経営上の立場				
			主たる労働力	家事中心で農業は補助的立	勤め（パートも含む）が中心で農業は補助的立	その他	合計
就業形態	農業	度数	75	47	1	6	129
		就業形態の％	58.1%	36.4%	0.8%	4.7%	100.0%
		農業経営上の立場の％	75.0%	43.1%	3.8%	40.0%	51.6%
	雇用正社員	度数	1	3	4		8
		就業形態の％	12.5%	37.5%	50.0%		100.0%
		農業経営上の立場の％	1.0%	2.8%	15.4%		3.2%
	パート	度数	2	3	8		13
		就業形態の％	15.4%	23.1%	61.5%		100.0%
		農業経営上の立場の％	2.0%	2.8%	30.8%		5.2%
	その他・自由・自営業	度数	2	7	9	4	22
		就業形態の％	9.1%	31.8%	40.9%	18.2%	100.0%
		農業経営上の立場の％	2.0%	6.4%	34.6%	26.7%	8.8%
	無職	度数	20	49	4	5	78
		就業形態の％	25.6%	62.8%	5.1%	6.4%	100.0%
		農業経営上の立場の％	20.0%	45.0%	15.4%	33.3%	31.2%
合計		度数	100	109	26	15	250
		就業形態の％	40.0%	43.6%	10.4%	6.0%	100.0%
		農業経営上の立場の％	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

第3表　農業面積と労働時間

就業形態		農業面積・経営規模	農繁期の労働時間	農閑期の労働時間	平均労働時間
農業	平均値	454360.08	10.0203	5.4554	7.1711
	N	117	123	112	97
雇用正社員	平均値	11127.443	10.8000	4.2500	2.5000
	N	7	5	4	4
パート	平均値	11122.125	7.3750	4.8125	5.2222
	N	12	8	8	9
その他・自営・自由業	平均値	39385.008	10.2333	4.3000	5.3000
	N	18	15	10	10
無職	平均値	6076.9937	7.1803	2.4889	4.1069
	N	70	61	45	51
合計	平均値	243329.49	9.1368	4.5894	5.9360
	N	224	212	179	171

農業面積は、農業女性が桁違いに大きく約45ha、正社員、パートは共に約1.1ha、自営3.9haがこれに次ぎ、無職0.6ha（無職と答えた理由？）と少ない。農地の広さが、女性を農業に従事させるといえよう。

労働時間も農業女性が、農繁期、農閑期、平均の労働時間数で、最も長時間である。

正社員、パートで農繁期約10.8時間、7.4時間とあるのは農繁期に休暇を得て農業を行うのか、或いはまた、自分でなく農家としての家の人の時間を書いたのか不明である。

II　問1　更年期に農作業に取り組む上での困難（複数回答）

この問に対する回答を分かり易くするために農業女性について回答数の多い順に並べると、第4表のようになる。

「体力、視力の低下」など、更年期にこれまでより低下した、と感じる度合いの大きいものが上位に来ているが、「これまでと変わったことはない」という人も32.5%いる。

一般に立ち作業よりかがむ作業がつらいことは、他の職種とも共通である。

第4表　農業女性が農作業上で感じる困難

回答数の多い順	項　目	人　数	%（複数回答）
1	体力の低下を感じる	60	52.6
2	視力の低下を感じる	47	41.2
3	今までと変わったことはな	37	32.5
3	かがむ作業がつらい	37	32.5
5	農場にトイレがなくて	36	31.6
6	疲れ易く根気が無くて続かない	29	25.4
7	スピードが落ちる	25	21.9
8	立ち作業がつらい	20	17.5
9	地域の婦人会など役職を頼まれるのがつらい	18	15.8
9	その他の症状	18	15.8
11	皮膚が過敏になる	10	8.8
12	農機具等の操作がつらい	5	4.4
13	地域の共同作業がつらい	1	0.9

一方農機具等の操作は、割に平気でこなしている人が多く、後のケース・スタディでも語られているように機械操作は「へっちゃら」なのである。

地域の婦人会の役員などは億劫だという人がかなりいるが、役職を得てそれが更年期を乗り切る要因になった人もあることが後のケース・スタディによって示されている。

一般の人と同じアンケート（一般アンケートと略記）で得たデータを見ると農業女性は、一般の人に比較して更年期の身体症状と精神症状（一般アンケート問3）の訴えの割合が低い。

一般（農業以外）の人より訴えの割合が大きかった項目はさすがに、腰痛（農業女性32.6%、一般23.9%）、関節痛（16.3、15.5）等であるがその他の症状、特に精神的症状（鬱状態、不安感、眠りが浅い、etc.）を訴える割合は農業女性は一般より数値が低くなっていた。

2）　特に感じたこと（◎ を付ける）

◎ を付けた農業女性は15人しかいないが多い順から並べると、

順位	項　目	人数	%
1	疲れ易く根気が続かない	5	33.3
2	視力の低下	4	26.7
3	かがむ作業がつらい	4	26.7
4	体力の低下	3	20.0
5	立ち作業がつらい	2	13.3

次いで農場に「トイレが無くて」、「地域婦人会の役職」が１人（6.7%）である。

類似の一般アンケート問３「更年期に感じた症状」において◎ を付した農業女性の回答順位は、

1「のぼせ、ほてり、発汗」、14人（30.4%）

2「肩こり」７人（15.2%）

3「頭痛」６人（13.0%）

となっているが、これらの症状でも一般女性の回答数の方が、50.8%、26.2%、18.5%と大きくなっている。

そこで、農業女性の回答%が一般女性の回答%より大きい項目を探すと、「関節痛」（農6.5%、一般0.0%）以外は、「月経の量が多くなった」（農13.0%、一般8.7%）。「月経期間の延長」（10.9、2.1）「子宮筋腫関連の悩み増」（6.5,0）、「性欲減退」（6.5,4.6）、「性交痛」（6.5,0）等月経や性に関するものが多い。この傾向は、一般アンケート問６「閉経後の性生活」において、「閉経後性生活が減った」（農40.8%、一般26.8%）、「閉経後性生活意欲なし」（40.8、28.8）、「閉経後性生活嫌だ」（28.6、16.8）に農業女性の方が一般より多かったのとよく一致する。しかし、それを「寂しい」（3.6、3.4）とは感じていない。

農業女性は、一般よりも更年期における月経上の悩みが多く、性生活に「重きを置いていない」或いは「あまり関心を持っていない」といえるかも知れない。

III　問２　更年期に当面した家族関係の問題

これは、一般アンケート問８（複数回答）「更年期に抱えていた問題」に、特に家族の分を補足して調査したものである。　これに関しても農業女性に関し、多いものの順に並べてみると第５表のようになる。この場合は、自営と無職の人についても併記した。

第５表で「特に問題なし」と回答した人が過半数だが回答文の最高位は、「農村の将来への不安」に40人（37.7%）と集中している。

一般アンケート問８においては農業女性による回答の最高位は、①「子供の恋愛、結婚」93人（43.7%）、②「夫の親の介護」69人（32.4%）、③「仕事の多忙さによるストレス」60人（32.4）、④「子供の受験」40人（18.8%）となっている。一般女性の、①仕事の多忙さによるストレス」（28.8%）、②「子供の受験」（27.6%）、③「子供の恋愛、結婚」（24.4%）、④「夫の親の介護」（21.9%）と比較すると「子供の恋愛、結婚」と「受験」の

第5表　更年期に当面した家族関係の問題

順位	項目	農業女性		自営		無職	
		人数	%	人数	%	人数	%
1	ほとんど問題なし	56	52.8	9	52.9	32	45.7
2	農村の将来への不安	40	37.7	5	29.4	9	12.9
3	舅・姑の介護	13	12.3	1	5.9	10	14.3
4	夫の親族への気兼ね	12	11.3	1	5.9	3	4.3
5	後継者の結婚相手が決まらない	10	9.4	0	0.0	1	1.4
5	夫への不満	10	9.4	0	0.0	7	10.0
7	子供への仕送りの負担	9	8.5	0	0.0	1	1.4
7	夫の病気の介護	9	8.5	0	0.0	1	1.4
9	夫との性生活を楽しめない	7	6.6	2	11.8	8	11.4
9	舅・姑との不和	7	6.6	0	0.0	9	12.9
11	子供が後継者にならない	6	5.7	1	5.9	7	10.0
11	自分の個室がほしいのになかっ	6	5.7	0	0.0	2	2.9
13	近隣への気兼ね	4	3.8	0	0.0	3	4.3
14	夫の親族との不和	3	2.8	0	0.0	1	1.4
14	孫の世話	3	2.8	4	23.5	6	8.6
14	愚痴を聞いてくれる人がいない	3	2.8	1	5.9	5	7.1
17	嫁婿への不満	1	0.9	0	0.0	3	4.3

順位が入れ替わっており、農村での嫁不足と後継者不足を反映したものと解釈した。しかし、この問２では、「農村の将来への不安」が多数の項目を吸収して「後継者の結婚相手が決まらない」10人(9.4%)や「子供が後継者にならない」６人(5.7%)等をはるかに引き離している。後継者問題の両方を合計しても16人にしかならない。「農村の将来が不安」が多数を占めるというこの傾向は次の自由回答やケース・スタディでも顕著に現れてきている。

「夫の親の介護」は、二つのアンケートで共に上位を占めているいるが、一般ではそれと殆ど同じ数の「自分の親の介護」(19.0%)が続くのに比べ農業女性では、9.9%と10ポイント近くも低くなる。農業女性にとっては、まだ、夫の親の方が自分の親よりも介護の対象として大きな責任と考えているのか、或いは自分の親は嫁との同居率が高いため、介護の義務を感じなくてすむからであろうか。(一般アンケートで「現在同居の家族」では、夫婦と夫の両親（農業女性3.0%、一般1.7%)、夫婦と夫の母（9.5%、4.5%)、夫婦と息子夫婦・孫（22.0%、5.7%)、夫婦と息子夫婦（3.0、.7）となっている。)

子供への仕送りの負担は、このアンケートのみに設けた項目だが９人（8.5%）と地方独自の数字を示している。

また、「夫の親族への気兼ね」も12人（11.3%），「近隣への気兼ね」４人（3.8%)、もまだかなり上位に存在する。「自分の個室がほしい」も数は多くないが無視できない問題でもある。

一般アンケートでは、嫁・姑の不和も農業女性の方が（13.1、7.3）多いが、この農家対象のアンケート問２においても「舅・姑との不和」は、７人（6.6%）存在する。しかし、更年期頃になると「舅・姑との不和」より「舅・姑の介護」の方が13人（12.3%）とウェイトが大きくなる。

さらに、「夫への不満」10人（9.4%）の方が「舅・姑との不和」より上位を占めているのも、更年期頃の現象として当然のことかも知れない。

「孫の世話」は、第５表の自営が４人（23.5%)、無職が６人（8.6%）あるのに対し農業女性の比率は、３人（2.8%）と少ないのも女性が仕事を持っていることと孫の世話への関係を表しているといえるかも知れない。

家族の問題で「特に感じたもの」に◎を付した人は10人にすぎずアンケートの回答数としては少なすぎるが、

1「舅・姑の介護」　３人（30.0%）

2「夫への不満」、「農村の将来への不安」　２人（20.0%）

3「夫の親族との不和」（舅・姑以外)、「夫との性生活を楽しめない」、「夫の病気の介護」、「後継者の結婚相手が決まらない」、「夫の親族への気兼ね」、「近隣へ

の気兼ね」、「自分の個室がほしいのになかった」、等が１人（10.0%）となっているのも○の場合とよく一致している。

○の第５表と異なり「舅・姑の介護」が最高位になったのは、現在直面している問題だからであろう。

Ⅳ　更年期について語り合ったり相談したりする人、共感してくれる人について

この問題も、一般アンケートの問５、「医療機関の他に一番親身になって相談してくれた人」を補うためのアンケートである。

結果を農業女性について、回答数の多い順に整理したものを第６表に示す。（自営、無職の場合も併記）

第6表　更年期について語り合ったり相談したり共感してくれる人

順位	項目	農業女性		自営		無職	
		人数	%	人数	%	人数	%
1	近所の友人	52	47.3	7	36.8	35	46.7
2	夫	37	33.6	9	47.4	22	29.3
3	趣味などの活動仲間	31	28.2	5	26.3	24	32.0
4	相談する必要を感じない	25	22.7	3	15.8	11	14.7
5	実家の姉妹など	23	20.9	5	26.3	16	21.3
6	JAなど地域の活動仲間	16	14.5	5	26.3	8	10.7
7	学生時代の友人	15	13.6	4	21.1	7	9.3
8	かかりつけの医師	14	12.7	1	5.3	3	4.0
9	既婚の娘	10	9.1	4	21.1	16	21.3
10	未婚の娘	8	7.3	1	5.3	9	12.0
10	実家の母	8	7.3	2	10.5	7	9.3
12	同居の嫁	7	6.4	1	5.3	2	2.7
12	その他の親族	7	6.4	1	5.3	3	4.0
14	未婚の息子	4	3.6	0	0.0	0	0.0
15	相談できる適当な人がいない	3	2.7	0	0.0	0	0.0
16	既婚の息子	2	1.8	0	0.0	2	2.7
16	別居の嫁	2	1.8	0	0.0	1	1.3
18	姑	1	0.9	0	0.0	1	1.3
18	保健所の専門職員	1	0.9	1	5.3	0	0.0
18	その他	1	0.9	0	0.0	1	1.3

「夫」が２位で37人（33.6%）、４位に「相談する必要を感じない」25人（22.7%）、５位に「実家の姉妹」23人（20.9%）の他は、１位「近所の友人」52人（47.3%）、３位「趣味などの活動仲間」31人（28.2%）、６位「JA など地域の活動仲間」16人（14.5%）、７位「学生時代の友人」15人（13.6%）と一種の友人仲間に相談している。

実家の姉妹も含めて、同年代の気のおけない同士の間で相談し合う傾向は、一般アンケート問２でも強いが（「女の友人」農業女性25.8%、一般39.3%）、母や娘等比較的年令が開くと、相談しても分からない部分が多くなるためと思われる。

保健婦など専門職員、医師などの相談例は少ないが更年期の相談にのってくれることを望む声は自由回答やケース・スタディに出て来ている。

「家族の問題」問２第５表で夫への不満がかなり高いにもかかわらず相談相手の２位に夫が出てくるのは、医者に行ったり仕事を休むのに夫の許可が必要なのか、或いは他に相談相手が居ないからであろうか。

◎を付したものは、全部で12人しかなくアンケートとして成立しにくいが、「夫」４人（33.3%）、「近所の友人」３人（25.0%）、「未婚の娘」、「実家の姉妹」、「学生時代の友人」、「趣味などの活動仲間」、「保健婦などの専門職」が１人（8.3%）である。

Ⅴ　自由回答

問４　50代以降の人生であなたが目標としていること

この設問で得られた自由記述を項目別にまとめると、第７表のようになる。

第７表　問４のまとめ

項　　目	回答数	備　　考　　特に数字を入れていないものは（１）例である
健康	28	呆けないよう（３），農村におれることの環境を生かして、ドライフラワー、花の加工品を作りたい
農業		
農業を続ける	29	楽しみながら（３）、夫婦二人で（２）、趣味と実益（２）、自給自足の暮らし（２）、野菜とハーブを作る 誇りを持って、地域の人に新鮮な野菜とハウス薄栽培がしたい
グループで農産物の加工・販売	5	朝市、老人会と連携し小豆を作ってもらって餅を作って販売している、漬け物など加工
生き甲斐		
惜しまれるような人に	2	農業指導 、生き甲斐を持って
住みよい町づくり	8	若い世代が親しめるような、環境問題（リサイクル活動）（２）、水をきれいに）
役に立っているという実感	6	育児相談、次世代に知恵と経験を、長男夫婦の農業の支援
地域をよくするボランティア活動	9	
生き方　（姿勢）		
ゆとりある暮らし（マイペース）	10	できるだけ外出の機会を、余暇を持って、経済的に自給自足
自分らしく生きる	2	
自分を大切に	3	いつも美しく、
毎日を明るく楽しく	9	積極的に
若々しい心で	2	
自立して	6	精神的に（２）、介護（２）や経済（２）を子に頼らずに生きたい
趣味		
一般に趣味を生かして	14	何でも積極的に
これまでの趣味を続ける	17	日舞（２）、和裁（３）、書道（３）、水墨画（２）、お茶（３）、１人でヨガ、華道、カラオケ、着付けを、１００名山制覇
新しく始める	12	お茶（２）、いろんなことにチャレンジ、車の免許を取って行きたいところへ
旅行	14	家族で行く、夫と世界中を（２）、友人と３泊ぐらいで（２） 年３～４回（２）
人間関係		
家族仲良く	13	お嫁さんと（４）、姑とうまくいっていないので嫁と仲良く、姑とも嫁とも、一家（２）、夫婦仲良く（８） 信念を持つように育児をしたのでその結果を見守りたい
友人、近所の人と仲良くしたい	11	
サークル（女性の会・生活改善グループ）	5	勉強できるようなサークルに入る、農作物の種類を覚える、農業経営を考える勉強をしたい（２）
その他	4	姑と舅の介護で夢も目標もない、預金（１日百円）（２）

第７表に示すようにまず、農業を続ける、農業を通して、地域に貢献する・・・これから少し違った形でといった目標が最も多い。その中からいくつかを選んで列記する。

これまで一筋に農業をして来て、自分の生き方としてこれ以上のものはないというより、生き方として大きなものを得たと思う。しかし、今自分でどんな農業をやっていくかということに、突き当たっている。自分で何を作り、どんな風に農産物を処理するかをじっくり考えたい。(63才)
自分一人の空間を常に持ちながら、人と会いたい時は会って、話をしたり仕事（農作業のことです）をしたり、趣味を共有したい－－－－ 老人ホームしかないのかなあ。せめて老人ホームがそんな場にならないかなあ、それとも自分たちの村をそんな形にできないかな、等と夢のようなことを考えています。(59才)
農業は嫌いではなく、家に居るより、畑にいる方が気分もすっきりする。今まではがむしゃらに働いてきたように思います。これからは女性の意見も通る様な農業経営にしてゆとりを持ってやっていけたらと思っています。(46才)
グループ活動を楽しく仲間と共に 農産物加工にがんばって手作りの良さを地域農業の振興に活動を続けたいと思って為る。(66才)
今60代が自分の人生の中で一番いきいき自由であるとその喜びを実感している。65年貯えた人生の経験を生かしながら今新しいことに挑戦しようと準備中。仲間と共に農村、農家の中で培って来た知恵と力を生かし、高齢になってもいきいきと働け、大勢の人が集まって楽しめる場所づくり、特に都会との交流にも力を入れ活力ある地域作りを、と今燃えている。(65才)

しかしながら一方、それどころではない人もいる。

夫の父母、自分の母が老いてきて、介護に体がくたくたです。農業も出来ず目標など持てない。(55才)
老母が健在の為、ぐずぐず云っている、ひまがない、 夫と助け合いながら、健康で過ごせたらと思う。(67才)
健康が唯一の目標です。というのは、今、健康ではないのです。更年期以来ずっと頭痛、肩こり、食欲不振に悩んでいます。腎臓も少し悪くしています。 好きなことをするにも体の調子が悪いので。(65才)

この人は、要望のところに、人間ドッグに格安で入れるように、と記入している。

問５　50代以降を健康に生きるために、あなたが特に心がけていることがありましたら、ご自由にお書き下さい。

第８表　問５のまとめ

項　　目	回答数	備　　考　　特に数字を入れていないものは（１）例である
食生活	62	体に悪いもの（添加物、農薬）はとらない（４）、自然に沿った食生活、安全なもの（８）、減塩食（５）、糖制限（２）、　菜食中心（１２）、バランスの良い食事（５）、自家製の野菜（12）、食生活の改善、間食しない、１日３０種品目、自分一人で作る、牛乳をとる（２）、自給自足で（経費節約のため）（２）
農業		
ずっと続ける	12	過重労働になりやすいので無理せず、楽しみながら（３）農産物の加工（２）、ゆとりの農業
自然と親しむ	8	山歩き(一万歩)、山から材料をとって来て工芸品を作る
スポーツ	41	歩く（３１）、水泳（４）、ダンス（２）、ストレッチ体操（２）、市のはつらつ体操、エスカレーターやエレベータを使わない（２）
休養をとりたい	1	
趣味	17	詩吟（２）、お茶（２）、日舞（２）、カラオケ、旅行（７）、英会話（買い物ツアーでない外国旅行をするため）、音楽会、よく遊ぶ
生涯学習、勉強	8	自分にあったものを、楽しみながら
生活態度	25	無理しない（１６）、ストレスをためない（４）、くよくよしない、よく話し合う（２）、悩みを秘めずに話し合う、規則正しい生活（６）、睡眠を充分に（４）、笑って暮らす（２）、明るく楽しく（３）、プラス志向（５）、今日が最高の日という生き方を
人間関係		
家族仲良くする	10	夫婦（３）、嫁と仲良く（３）、親と（３）
友人・仲間・グループを大切に	8	地域の人と交流（２）、地域活動（２）、若い人と交流（２）
社会団体で活動する	2	
生活改善グループ	6	農業の学習（２）、野菜加工（３）
ボランティア	4	心の研究と勉強のために
医療健康		
健康診断、市民検診を受ける	11	人間ドック（２）、骨密度測定（２）
健康管理	6	民間療法（薬酒作り）高血圧の予防、その他生活態度（２）
良い家庭医がある	2	１週間に１度はかかりつけの女医さんのところへ
マッサージ	2	
何もしていない	1	医者に行きたいが農業と親の介護でいく暇がない

さすがに、農家であり食生活に多くの人が注意を払っている。
自分で出来る限り生活を律している人がいる。一方、なかなか休養をとれない人もいる。(65才)

出来る限り自分を律して生きたい。食事は三度きちんと、ほとんど手作りのもので種類を多くと心がける。体を動かすことをいとわない、朝のテレビ体操、夕方大型犬と速いペースで20～30分歩くこと、睡眠は充分とる（６～７時間)、差し支えのない限り昼寝を15分位、仕事をしながら（家の中で）CD やラジオで音楽を聴く、疲れたとき音楽に合わせて自由に踊る

過労なのはわかっているのですが、仕事の上で休養がとれず、趣味もむつかしい。冬は、日が短いので、よく寝る様にする位ですが、縮小することを真剣に考えています。自分の人生だから、と、人に言われて。(60才)

問６　問４、問５を実現するために、国や自治体の政策として希望すること。

第11表　問６のまとめ

項　　目	回答数	備　　考　　特に数字を入れていないものは（１）例である
農業政策		
減反反対	6	余った米は貧しい国にあげても自給力の確保するべき（４）
国内生産の保護	6	
農業指導を	3	
後継者問題	5	希望するやりたい人が出来るような農業政策（２）、土地の貸与や経済的支援
農業政策をもっと真剣に	28	価格の安定策（８）、区画整備（機械化促進）（２）、輸入の無制限自由化反対（２）、農業だけで食べて行けない政策を改善（２）、農業をする人が増えるように（４）、農作物を手軽に販売できるように（４）、重税を考えて、一生懸命働けば食べていける農業を（２）、忙しい時若い働き手を派遣できるセンターを
健康問題		
医療		
医療費を安く	7	特に高齢期（４）、人間ドックを格安に、
近くに医療機関を	5	往診してくれる医者を（３）、女性の体について親身に研究と相談を（２）
健康		
体育館プール等の運動設備	4	
グループ活動のバックアップ	2	場所道具等の提供、貸し出し
夜街灯を明るく	2	夜走ったりする人のために（２）
交通を便利に	3	病院通いのためのバス等（回数はそれほどいらない、朝２回、昼１回、夕方２回、子供の車に乗せてもらうのは気兼ね）
生涯学習の講座等		
学習の場の整備	10	ヘルパー養成講座を近くで（２）、家庭介護の学習を
内容の充実		老後の備えについて（２）、文化講座の内容を豊かに（古典や歴史、地域の文化遺産）（３）、女性の地位向上（安心して働ける機会を）、健康法
生き甲斐		
中高年グループづくりの支援	2	
60歳以上でも参加できる授産所	1	
福祉		
公的介護保険に疑問いっぱい	2	
老人ホームやデイセンター等を増やして	3	お金のない人も利用できるように
年金の充実	2	国民年金だけでは
高齢社会対策法の早期実現	1	
くつろげる安価で明るい施設を	2	子供と交流の出来る場を、集まって話し合える場を（２）、中高年のグループ作り支援

医療について

農村女性は自然に恵まれよく働くが、医療に恵まれず、その点で健康を保てないと思う。特に更年期など、殆どの人が、正確な知識を持っていない。それ以後の健康に影響があるのか、もしそうなら、もっと真剣に治療とＰＲをしてほしい。(50才)
病院通いの手段がありません。車の運転はできたが、左足と左手が少し不自由になり免許を返上しました。子供に頼むのも気兼ねだし、子供は勤めているのであてにできません。朝夕２回、昼１回でよいからバスがあればと思います。タクシーばかりでは、お金がかかりすぎます。(63才)
在宅医療といいますが、公会堂にでも定期的に検診に来てほしい。(63才)

問４、問５を実現するために、という設問からは少しずれるが。

農業政策についての要望は、多数で多様である「働けば食べていける」ことを望む声、特に、減反に反対する声が大きい。反対の理由は、自分の収入のためもあるが、世界的な食糧危機の備えが必要ではないかと考えている。

農業で安心して生計を立てられる様に細かく見てほしい。 老人が働き手となる為め、若い人手がほしい時は来てくれる様なセンターを作ってほしい。(59才)

福祉に関しても意見は多い、特に農業女性は、自分の家があるので在宅で一人でも暮らせるように願っている。そのために、いつでも行ける所に授産所や学習の機能を持ったセンター等を望み、行政の対応に不満を持つ人が多い。

しかし、一方では「福祉」を税金の無駄使い、老人の甘えと考えて反対する人もいる。他人事で自分につながることと、捉えきれていないのであろう。この様な考え方に対する啓蒙も必要である。

兼業農家の税の重きをなげく今日この頃です。福祉と云うと何でも聞く、行政の見直しを求める。現在高い税金ばかり払って、何の恩恵も受けていない、我々の実態を知ってほしいです。福祉に金をかけないで！！ (67才)
老後を自由気ままに遊んでよいという考え方をしている老人に、どの年代になっても一生懸命に働いて、その暇に遊ぶべきだと、わからせてほしい。

Ⅵ. ケース・スタディ

農業の主力として活躍している女性を対象として約10例のケース・スタディをとり、農業女性の経歴、現在の状況、農業に関する考え方、更年期を中心とする身体的・精神的症状について調査し、農業女性の実態を考察した。紙面の都合により６例のみを掲載する。

事例. 1　夫と共に果樹園を経営して50年，Ｔさんのケース

経歴：京都府　綾部市在住　年齢71才、果樹園　23ha　経営

子供・女２人，男１人　現在なお主力として活動中　　更年期症状殆どなし

京都市の街の真ん中から、終戦直後、“理想の果樹園を”と燃える夫（兄の友人）に共鳴して、農地を果樹園に改造。一貫して低農薬・低化学肥料を実行し、最南端のリンゴ栽培等、独自の栽培経営を進めてきた。

「高齢社会をよくする女性の会」の会員でもあり、古い慣習の根強い地域で、不合理に反発、自分の生き方を貫いて来た。果樹栽培のリードは夫がしていたが、経営方針にも参画し農業機械も駆使して日本では女性では数人しかいない“種苗士”の資格も得て、夫と共に日本の果樹栽培のリーダーであり、世界会議にも出席する研究者でもある。

全ての労働を自分達夫婦と何人かのアルバイトでやってしまい、常にオーバーロードの状態である。更年期症状が無かったのは、感じている暇がなかったか仕事上の疲労と考えてやり過ごしてしまったのかもしれない。

夫の病気と死：5年前、夫が突然倒れて、身体不自由・言語障害になり入院、その後長期に亘るリハビリを行う。このときは、心も体もクタクタに疲れ倒れる寸前であった。

果樹園の仕事は、①自然の恵みを体いっぱいに受ける　②これまで自分がリーダーシップを取り情熱を傾けてきた仕事である　③夫婦二人で励まし合い一緒に続けられる等理想的なリハビリの条件を備えており、体は幾分不自由ながら、３年間で

①機械の運転、果樹の枝の選定の指導等はきちんとでき、②農作業の７割り程度はこなせる、③日常会話の大部分もたどたどしいながらできこなせるようになった。

しかし、農機具を至るところに置き忘れたり、漢字は書けるのに平仮名が書けない、突然理屈の通らないことをいう等、人間の頭の中がどうなっているのかついに分からずじまいであった。しかし、それなりに助けにもなり、新しい形の共同作業の可能性も見えてきたとき、他の病であっけなく亡くなった。

倒れてからは、ケアにも手が掛かり、自分がリーダーシップをとって来たつもりであったが、失ってみるとその喪失感は大きく、不自由ながらその指示や支援がどれ程大きな力を持っていたかを思い知らされた。知人と娘の支援で文字通り落ち込む暇もない状態で走り続けてきた。

体調・30代後半の更年期？：　34歳ごろ、このアンケートにある更年期症状に似た状態になり、近くの病院で子宮筋腫で手術が必要といわれたが京大病院で筋腫ではないと診断され今日に至っている。その後、過労のための腰痛や睡眠不足のための頭痛などはあるが更年期は自分では無かったと思っている。

息子は弁護士で京都在住、娘は恋愛して農家の跡取り息子と結婚した。今では、１日４時間、主として会計を見てくれている。休日にはこども２人もつれて一家で手伝いにも来る。農場は娘夫婦に継いで貰おうかとも思っている。

日本の各地から農家の子弟を預かったり、休み中にアルバイトに来たり、若い人の出入りは常にあった。今も農大を出た青年が一人同居している。

高齢者の村を作りたい：　土地は広いので、小さな１人用の家を沢山建てて、集会や趣味活動のできる事務所を中央に設けて、高齢者の村を作ろうかと考え、「高齢社会をよくする女性の会・京都」の人達にも話してみたが、遠すぎ田舎過ぎるので、賛成者は余りいなかった。１年前に隣接地に特別養護老人ホームができ、連携できるのでは、とまだ夢は捨てていない。

しかし、近所中高齢者ばかりなので自分も動けなくなったら、ある程度は子供が責任をとってくれねば、と子供には言っている。

自分の農業の今後について：　ＪＡの指導とは全く無関係に独自の判断で経営を進めてきた。もう少し高齢になったら、資格を活かして種苗の育成、出荷に絞ってもよい、と思っている。この仕事は日進月歩、絶えず勉強し研究会にも参加する必要があり、やりがいも

あるしキャリアもある。

事例. 2　農業一筋、少しずつ茶畑を拡げて

略歴：S39年結婚、　34年～41年までOL,　42年～現在まで農業
子供；女　S41年生れ、男　S43年生れ
農業規模；田　5反、
茶畑　S42年～45年　1,5 反、　45～50　2 反
50～H7 2,5 反　H7 ～H9　4,5反

家族・跡継ぎ：　夫は生活改良普及センターの普及員であり、現在は近くの農業大学校の舎監をしている。長女が生れたのでOLを退職し、舅と二人で農業をした。舅は賢い人で、陰口や嫌味は一切いわず適格な注意をしてくれた。94歳まで立派に生き、脳硬塞の発作で半身不自由になって1ケ月後食事をきちんと終えて、眠るように、無くなった

この人のおかげで、実家で、末っ子として僅かに手伝うだけの農業を、自分の仕事として、また自然を相手の楽しい営みとして、身に付けることができた。自分も死ぬまできちんとして生を全うしたい。

娘は、看護婦となりよき相談相手としていろいろ力になってくれる。息子は近くに住んでいるが、立派な舅と暮らしていても、同居にはいろいろ問題もあり、絶対に同居はしないと思っている。そのため、ヘルパー制度や老人ホームの充実をのぞんでいる。

息子には跡継ぎを強制はしまいと夫と話している。しかし、次第に欲が出て、やってくれそうな気配もある。自分達もそうして来たように、畑を少しずつ売ったり貸したりしてもよい、とも考えている。

更年期：　36歳のとき卵巣膿腫で手術、体調はその後ずっと優れず、41歳で子宮筋腫で再手術、劇的によくなった。その後50代後半から腰痛や肩凝り等、ごく軽い症状が出始めが、時によって異なるので自分では年齢のせいか疲れのせいと思っている。娘の勤める病院を便利に利用し、よき相談相手となってくれているのでとくに心配はしていない。

社会活動：　S 9年～現在　茶組合福天女性部長、H3年農業士に認定される
H 7年　福知山市農協西中筋支店　女性部長
H 8年　福知山市連合婦人会　遷喬学区副会長、H 9年より同会長

夫は仕事柄農業のことも良く理解し、勤めてはいるが、自分が大病・手術もしたので農業にも積極的に関わり、相談にも乗ってくれる。おかげで上記のような役職を受けることができた。自分は引っ込み思案で適性ではないが、他の地方の茶栽培の視察にも参加し、農業の将来を考えたり人間関係が広がって良かったと思う。今でも人前で話すのは苦手だが、孤独に陥りがちな農業人には何よりの機会であった。

事例　3　農家の跡取り娘として ―― 好きな農業を40年

経歴：　農家の長女（3人姉妹），跡取りとして育てられ、23歳で養子を迎える。

父は20歳のときに死亡、夫を送り出して母と二人で農作業。牛を使って、朝星夜星典型的な農婦だったが、機械の導入も村で一番早く、女で機械を駆使することに優越感を持ったこともある。水稲の他に西瓜、苺、きゅうりを作付けして一家で楽しんだ。

S58年圃場整備が完成、機械の大型化で農業は楽になった反面、今の農業収入ではその返済金などが負担になりつつある。S60年長年の協力者である母を失う。

夫は農業は殆ど任せ切り、休日と農繁期に2,3 日だけ手伝うという状況だったが、現在は定年退職してそれなりに参加している。息子と娘は、現代っ子らしく伸び伸び育ち、

年を重ねても一向に結婚する気配もない。悩んでも仕方ないか。
社会参加：　Ｈ３年、京都府の女性農業士の認定を受け、市の農村計画審議会委員となり、農業に関わる者としてこれまでとは違った意味での自覚が生まれた。

Ｈ 2年より、地域婦人会に参加、Ｈ 6,7年には市の婦人会長として新しい人間関係や組織の活動に積極的に関わっていった。同時に、市の女性政策懇話会委員、Ｈ 9年には、人権擁護委員の委嘱もうけ、まだまだ勉強しなくてはならないことがばかり、とつくづく思い知り、まさに私にとって生涯学習の時代。多くの人との出会い、触れ合いがあり、新しい自分を発見することもできた。地域の人間として自分に何ができるかを問いつつ、今は長い間片手間にしていた農業に少し手を掛けてみようと婦人会長を退きまた農婦に戻りつつある。
更年期：　全く健康、おかげで更年期を自覚することも全く無く今日にいたっている。
農業：　農業には大変厳しい時代となってきた。しかし、ものをつくりだす喜び、成長を見詰める楽しさ、土をいじる暖かい手応えに変わりは無い。農村の女性も勉強している。男女共同参画の時代に入り今後は男性も女性も対等に話し合い、暮らせる時代が来る、と思うと、若い人が羨ましくなる。若い人に農業の楽しさを伝えるのは、我々の仕事だが何より若い人が進んで来てくれるような農村作り、さらに経済的になりたつ農業を確立することが必要である。

事例　4　子宮筋腫を乗りこえて、地域活動を

経歴：　６キロ程離れた農家から農家へ嫁いだ。実家より婚家の方が耕地面積は大きく、舅・姑と共に農作業をした。夫は、役場に勤務し、帰宅後や休日には手伝った。

農業機械等も導入し、近代化には積極的な方であった。自分も、機械操作は興味があり、すぐに覚えて一家の中心的働き手であった時期もある。

また、農協婦人部にも参加し、農産物加工やその販売にも（事務や会計も引き受け）積極的に関わった。
体調：　しかし、子供が出来なかったため、28歳（結婚６年目）のとき近くの産婦人科の医者に行き、薬をもらって飲んだが、一年近くたったとき、めまい、動悸、息切れ、月経過多、頭痛、便秘、性欲減退等、ひどい症状になり病院通いを止めた。薬を飲まなくなったら、症状も治まって来た。その医者から、福知山市の国立病院を紹介され、子宮後屈の診断で手術を受けた。術後も体体調はすっきりせず、約３年近く苦しい状態が続いた。その後、32歳の時不正出血や疲れ、冷えのぼせ、動悸の症状が再び起こり子宮筋腫と診断され、手術を受けた。

上記の症状が、単なる身体的症状、子供の出来ないためのストレス（子供が出来なかったことを、かなりしつこく攻められたと思う。特に、伯父に当たる仲人が責任を感じたのか、うるさかった。）のせいか、自分でも、よくわからなし、飲んだ薬の種類もよくわからない。夫の方は再三要求したが、診断を受けてくれなかった。

しかし、筋腫の手術後は、体もすっきりし、子供のこともあきらめたので（私の離婚のことなども話題になったようだが、夫がきっぱりと拒否してくれた。不妊について男が受診しなかったことが、心にひっかかっているが、このことで許せる、と考えた。）精神的にも極めて順調になった。

しかし、自分も今60歳,まわりの女性の更年期の症状はいろいろ見てきている。自分の場合も含め正確な対応が必要と思う。
農産物加工とボランティア：　舅は80歳で亡くなり、姑の方は現在81歳で元気である。夫は、定年退職後は「弟子入り」と称して一緒に農業をしているがよく話し合って、組合員

としての登録も私の名義で入り、或いは、預金口座の名義も私と夫の二人別々となっている。　今は、次第に農業の主たる労働力を夫の方にゆずり、私は、地域女性会での漬け物、味噌作り、山菜加工の中心的担い手であり、その他、高齢者の会食ボランティア（月２回）として、毎日が楽しい。

後継者：　後継者の問題の悩みがあるが、これは伯父の息子の次男が、農業が好きだということで農業高校（綾部）を出て、８年間、高校の３年間を含めて同居しており、農業高校の同級生の女性と結婚している。結婚を機に別棟を建てて、彼らは自分たちのしたい農業を目指して、楽しそうに夢みたいな話をしている。何一つきっちりとは決めていないので、もうそろそろその時期と思っている。

あの３～５年間は、今から思えば、暗い絵のようなものであった。

事例　５　二度のひどい更年期症状をホルモン療法で

年齢　56歳、　農業　主たる労働力、　2.4ha、米、ハウス、露地による野菜栽培

夫（59歳）、夫の両親と同居、　子供３人（うち１人は、生後１ヶ月で死亡）２　人は（女、男）それぞれ独立している。（長男は大阪、長女は福知山）

高校卒

経歴：　農家の長男と結婚（24歳）。夫は工場勤務で農業は殆ど手伝わなかった。

農業は、結婚以来すぐに参加した。“体が折れる程”というが、まさにその通りの状況であって、子供は、姑が殆ど育てた。32歳から体調をくずし（血のみち、といわれてすごく嫌だった）、作業中にめまいがしたり、肩こり、腰痛、時には頭痛もあった。その時生まれた３人目の子供は、早産で１ヶ月程で亡くなった。

その後、わがままを言って実家で約20日程養生させてもらった。

体も恢復し、その後は、農業で“主たる労働力”となりつつあった。農業自体は割と好きだったが、何故こんなに働かねばならないのか、これで一生終わってよいのか、という思いは常にあった。舅と共に働くことが多かったが、口数は少ないがよく働く人で、丈夫（なので、私の体調には理解があったとはいえない）で、農業の主力であったが、昭和63年耕耘機で足を怪我して、それ以来私が主力とならざるをえなかった。近所からもよく働く嫁、といわれていた。（ただし、旅行や温泉行き、家族で出かけることなどはまず無くて、その点では子供も可哀想であった。もう少し家族で楽しむことがあればよかった。）

更年期症状：　順調に働いていたが、50歳位の頃から、ひどい更年期症状が出始め、問３の殆ど全部が揃うような状態になった。特に、春、少し暖かくなった頃が強く、力のいる作業が辛く、特に冷たい水でする仕事は、ゾッとする程拒否反応が起こった。

夫の手前これまでは割と無理をしてきたが、精根尽きて、朝起きられないで半日以上寝込むこともあった。医者にもかかったが、特に悪い所は無い、といわれれ、相変わらず”血のみち”といわれた。一応は少し楽になって、また働いた。

更年期の症状が再び出たのは、53歳の時。以前からそうであったが、目まいや立ちくらみがあるので脳性疾患や、平衡感覚の病気だと心配なので、近くの医者に行ったが、その心配はなかった。

症状は辛くて、もう農業も嫌になり、引き込まれるように寝てばかりいた。昨年の４月頃に、夫が真面目に一度ちゃんと調べてもらえ、農業も一切やるなといってくれて、福知山の市立病院（家から車で約40分）に行き、本気で治療することにした。夫と舅で、ごく必要なことだけはやってくれたようである。

１週間入院して、やはり更年期障害とのことで、ホルモン療法もしてもらったが、前の時に来てくれていたら良かったのにね、といわれて後悔した。

今は、大分良くなった。野良仕事も暫く離れているとまたやりたくなり、昨年10月から半年ぶりに畑に出た。その時、農業がなかったら、まだ、ぐずぐず言っていたかも知れない、と思った。

再び農作業：　劇的ではないが、”うす紙をはぐように”少しずつ良くなり、今年から普通に働いている。早くちゃんとした治療をするべきだったと、後悔しているし、人にも勧めている。

夫も定年に近いのでもう再就職せずに、農業をやってもらおうと思っている。ただ、この仕事が無かったらと思うと、自分にとって今は農業が大切なものに思える。

社会活動：　第２回目の時、地域婦人会副部長をっすすめられたが、その時は出掛けるのも、人に会うのも嫌で固辞してしまった。それも、やっておけば新しい世界が開けたかも知れないとは思うが、やはりあの時は、それどころではなかった。

地場野菜として農業試験場の取り組みで、寒冷地に適したホウレンソウ栽培を始め、消費者の人が見学に来たり、直接出荷したりして、前途に少し光が出てきたように思うし、いろんな人と知り合いになれた。これは良かったと思っている。

跡継ぎ問題は、息子が今32歳、定年退職になるまでがんばろうかと夫と話している。

農業について：　農業政策として米の減反は、やはり賛成できない。食糧不足の国にあげても良いから、主食の生産力は保っておくべきだ、と話し合っている。でないと世界が飢える時が来るのではないか、その時に困るのではないか。

消費者と直結してみて、学ぶべき所、収入等の面も含めて、良いことも多いが、農業の実情を知らない勝手すぎる言い分もあり、交流を密にすることが大切と思った。

更年期について：　更年期に関しては、自分は失敗したと思う。市立病院の医師が言うように出来るだけ早く、きちんとした治療をすべきだ。しかし、医者にかからなかったわけではないので、「血のみち」などという生理的に嫌な言葉で片付けたりせず、医者にも真面目に取り組んでほしい。

家族も怒ったり無視したりせず、女性の体調について充分に話を聞いて、協力することが大切だ。私の場合は、２度目に起きられんようになってから、ようやくまじめに考えてくれたようだ。

これから、老人介護や自分たちの体力、農業で生活を保つ方策等、問題も多いと思うが、それを乗り切るのには、十分に話し合い、知恵を働かせ勉強もしないといけないと思う。

跡とりは長男に“定年で帰って農業”するのも良いとは思うが小さい時に、ある程度仕込むなり、農作業を教えるなりしておかねば難しいだろう。

自分は、姑に預けっぱなしなのが心配で、長男を畑によく連れて行ったので少しは農業についての心得はあると思う。

事例　6　様々の農業活動に参加して

年齢　49歳　　農業の推移：稲作から、ハウス栽培へ

夫、子供２人　　農地　約２ha

稲が減反、引き合わないので、ハウス栽培に切り替えたいが費用がかかるので出来ずにいる。このままの農業を体の続く限り続けるつもり。後継者はない。

生活改善の幹事、“かあちゃんのまごころ市”（市内に野菜を搬入し、直販の試み）等農業を通して、様々のネットワークを作り、多くのすばらしい人と知り合い、先導者としても役割を果たした。これからもいろいろのことを機会があったらやってみたい。

だが、隣近所は旧態のまま、一向に変わらず嫌気がさしている。福知山での成人講座にも意欲的に出て、この頃では意見も出せるようになり楽しみである。

現在、地域に料理も出来るような加工所がほしい。
体調：　紫外線の影響　といわれるような体調の変化が出てきている。無理を承知で働かねばならないこともあり、定期的な休養日をつくることが課題と考える。
更年期症状は、いくつか思い当たるが、特に病的なものとは思わないので、そのままにしている。
親の介護は、今はよいが、する立場になったら、夫とパートナーとして協力しようと思っている。
農業政策：　減反はこのまま食料豊富な時代が続くとは思えず、食糧危機になったとき、危険と思うし農家の意欲を削ぐので良くない。
農業は環境を守り人々の生命を支える仕事だが、だからこそ安全で栄養価の高いものを生産する義務があるし、高齢少子化時代になり、その流れはきっちり受け止めて考えねばならない時代となった。JA 等も行き当たりばったりではない長期を視野に入れて農業の指導に力を入れてほしい。

Ⅶ　農業女性の更年期の実態調査ーケース・スタディおよび農業女性に対するアンケートから農業女性の特性を検討する。

1．ケース・スタディの対象とした農業女性の特徴

今回の調査は、農業改良普及センターや地域の生涯学習で知り合った女性が多く、農業士であったり、地域の産直活動や加工食品づくりのリーダー、あるいは地域婦人会の役員を勤め、農家の女性として極めて意欲的かつ積極的な人々であった。
ほとんどが第２種兼業農家であり、一家における農作業の中心的担い手であり、発言権も強くＪＡの組合員として自分の名前で登録し、自分名義の口座をもっている。新築の家の1/2 を自分の名義にしている人もある。
農作業の機械化にも積極的で機械の操作は“へっちゃら”（農家の女性はおおむねそうである、とのこと）である。

若い頃は、農家の女性だけが働らかねばならないこと、労働がハードなことにこだわっていたが、現在では、多くの女性が仕事を持つようになって、家事と勤務の両立が大変であること、その一方、農家の女性の労働が、機械化により、次第に時間的ゆとりができて、農繁期以外は自分で時間のやりくりができるようになった点を自己評価している。
跡継ぎは“子供に期待できない”人が多いが、“そのうち欲も出るだろう”“定年になるまで待っていよう”等、高齢社会ゆえのおおらかな考えもあるようだ。農業はやりたい人がやってこそ、という実感もある。しかし、農作業の楽しさややりがいを若い人に伝えることは絶対に必要だ、と考えており、その点では、自分も他の農家ももっと努力を傾けるべきと思っている。しかし、農業だけでは生活が成り立たないことに、怒りを持ってもいるし、それを何とかせねばと考えながら、まだ道が見えていない。

2．社会活動

生活改善活動や農業改良普及センターで作物の栽培法の研究や加工、直売等、様々な活動に参加して、農業の将来を考え、収入増の工夫もしている。

また、婦人会や生涯学習への参加も意欲的であり、役員を経験した人は、自分の世界が広がり、さらに広範囲のネットワークに参加できて、その時期が丁度更年期と重なり、そのおかげで更年期症状を感じずにすんだのでは、という人もある。

こういった活動に参加する人は一般に意欲的で、広範囲の人間関係が得られ、行政に相談したり、行政に意見をいうこともできるが、ごく身の回りの“近所”はまだまだ農村的封建制が残っており、悪口をいったり、足を引っ張ったり、未成熟でうるさい部分が残っている。

3．更年期症状

更年期は感じなかったと言いながらも、あるいは、老化かな、と思いながらも、更年期らしき症状は、現れてきている。農業が好きで生きがいを感じて意欲的に取り組む人、社会参加をして、自分の世界を広げ、生き甲斐や勉強の必要性を痛感している人は、一般に更年期症状を感じることが少ないと思うが、ただし、それで片付けてしまえる問題ではない。現にそのような人でも、更年期症状に苦しむ人もいるので、農作業との関連も含めてきっちりと対応してほしい。

さらに、農業をする人は一般に、いわゆる更年期よりもう少し早い時期に（30代）に体調を崩す人が多いように思う（特に根拠はないが、集まった人の意見である）

農作業との関係は不明だが、あるいは間違っているかもしれないが、子宮筋腫等、生理に関する病気も多いような気もする。そのままにして何ともない人もいるし、あるいは診断が違っていた人もある。このケース・スタデイにおいても一例ながら 2度も寝込むほどの激しい症状があり、最後に辿り着いた国立病院でホルモン療法を受け、漸く回復した例がある。一般のアンケートに於いて、農業女性の身体的症状のうち、「月経異常」や子宮筋腫に関する悩み」が一般より多いという結果が得られている。機械化で楽になったとはいえ、やはり農作業は体を酷使するハードな仕事であり、自然の中で働くことは健康的な環境であるという一方、農薬や紫外線に晒されその影響をモロに受け止める仕事でもある。農業に携わる女性の健康や身体の微妙な変化ににについて、また、30代のこの時期と更年期症状の関係について、もっと丁寧に研究し、その結果を知らせてて欲しい。

一般に、農業女性は、「更年期が無かった」という人が10ポイント近く多い。関節痛や腰痛、前述のように生理不順には悩みながらも、更年期症状の訴えも少ない。

また、医者を訪ねた数も一般とそれほどの差はないし、ホルモン療法もそこそこ受けており、受けたいと思っている人もいる。ホルモン療法を知らない人も特に多くはない。しかし、一方、医療機関が近くに無く通うのに不便であり、相談機関が無いとも答えている。このことから、農村女性に更年期症状が少ないという結論は簡単には出せないと考える。コンスタントに通い連続的な治療を続けにくいのではないか。公会堂や公民館を利用した相談の機会、或いは保健婦などのきめ細かな指導・相談の機関を増やすべきである。

また、ケース・スタデイに見るように、医者に行っても余り効果がないことに不満を持つ人もかなり多い。　農作業と言う体を使う物差しがあるため、体の変調に早く気付くと言うこともあるが、疲れのせいかと思い誤る危険もある。やはり、早い対応、適切な処置が必要で、医療を始め世間や家族の更年期に対する理解と対策を要求したい。

4．農業政策

農業政策に関しては、減反にたいする批判や長期の推移を視野にいれた指導を望む声が大きい

農業及びその経営に関して女性は主要な位置を占め、女性の声が届くようになっては来ている。しかし、近郊の農家では、福祉の世界の場合と同様、“女性がやっているのだから”“主たる収入源では無いのだから”という安易な理由から、農業できちんと生活が成り立つという、重要かつ根本的な課題が等閑に付されてはならないだろう。

5．農家の福祉に力を

跡継ぎ問題もあるが、農家の高齢者の介護（自分も含めて）特に在宅介護は生活問題としても、家族問題としても、地方の高齢者介護にたいする意識の遅れと共に、極めて重大である。自分達も懸命に意識改革に取り組んでいるが、公的支援、地域福祉の学習が何より急務である。

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

はじめに

先に実施した女性の更年期に関するアンケート調査について職業別の比較検討の結果、農村女性の特徴を、かなりはっきりと捉えることができた。しかし、農業に携わる更年期女性の健康については、よりきめ細かな対応が必要と考え、特に農村女性に対して、別建てのアンケートを作成しその特性を解明することにした。

さらに、京都府福知山市におけるケース・スタディを何例か求め農業女性の生活を追跡した。